散策ガイド

御幸寺山麓コース

（明治二十八年九月二十一日）

① 秋の城
山は赤松
ばかり哉

② 牛行くや
毘沙門阪の
秋の暮

③ 社壇百級
秋の空へと
登る人

④ 狸死に
狐留守なり
秋の風

⑤ 堂崩れて
地蔵残りぬ
草の花

⑥ 静かさに
礫うちけり
秋の水

⑦ 山本や
寺は黄檗
杉は秋

⑧ 畫をかきし
僧今あらず
寺の秋

⑨ 草の花
練兵場は
荒れにけり

⑩ 人もなし
杉谷町の
藪の秋

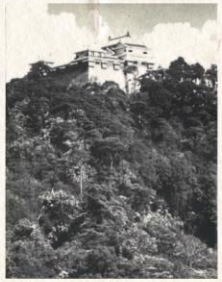
1 病院下〜毘沙門阪（びしゃもんざか）エリア

みどころ

当時の毘沙門阪の様子を想像しつつ、ロープウェイ通りを歩いてみよう。

■県立松山病院

現在の松山東雲中学・高等学校の場所に、当時、県立松山病院が建っていました。この病院は、大正二年に松山赤十字病院に変わり、その後、赤十字病院の移転に伴い、松山東雲中学・高等学校の前身である私立松山女学校が建てられました。



▲昔の松山城
（愛媛文化双書刊行会発行　『子規と松山』より）

▲昔の松山東雲高校
（『創造都市まつやま』より）

① 秋の城 山は赤松 ばかり哉（かな）

城山を見上げると、山一面に赤松が生い茂っていた様子を表しています。

■当時の城山

当時の城山には、赤松が多く植えられていました。

しかし、昭和三十年代にマツクイムシの被害にあい、ほとんどなくなってしまいました。平成十七年の松山市の調査によれば、城山の赤松の数は約七十本となっています。

みどころ①

昔の城山を想像しつつ、今の城山を見てみよう。

▲赤松の木立（イメージ図）

② 牛行くや 毘沙門阪（びしゃもんざか）の 秋の暮（くれ）

毘沙門阪に差し掛かると、沿道を牛が引かれていた様子を詠んでいます。

■毘沙門阪

ロープウェイ通りの坂の上は、松山城の鬼門にあたるため、毘沙門天が祀られていました。このことから、このエリアは毘沙門阪と呼ばれていました。

このエリアは、当時、城下町と農村の接点に位置しており、牛の行き来もあったようです。

▲農業を手伝う牛（昭和 30 年代）
（『創造都市まつやま』より）

2 六角堂（ろっかくどう）エリア

みどころ

東雲神社や六角堂の境内を訪ねてみよう。

▲昔の六角堂
（愛媛文化双書刊行会発行　『子規と松山』より）

③ 社壇百級（しゃだんひゃっきゅう） 秋の空へと登（のぼ）る人

東雲神社へ参拝に向かう人が、まるで空に登るかのように、石段を登っている様子を表しています。

■ 社壇百級（しゃだんひゃっきゅう）

社壇百級とは東雲神社の石段を表しています。

東雲神社の石段は二百一段あり、その壮大さから空へと続いているように見えます。

▶昔の東雲神社
（㈱国書刊行会発行
『ふるさとの想い出写真集　松山』より）

みどころ②

空へと登ると詠まれるほど長い石段を登ってみよう。

④ 狸（たぬき）死に 狐（きつね）留守なり 秋の風

狸も狐も姿が見えない六角堂に、秋の冷たい風が吹いている様子を表しています。

■ 六角堂（ろっかくどう）

六角堂とは、天台宗寺門派の常楽寺のことです。六角堂には狸が住んでいると信じられており、松山市役所前の「お榎（えのき）さん」に住むお袖狸（そでだぬき）と夫婦であったといわれています。

境内には、常楽寺の六角堂と並んで稲荷神社が建っており、そこには狐が祀られています。

みどころ③

六角堂と稲荷神社が相並びながら狸と狐を祀っている様子を見てみよう。

▲松山市役所前の「お榎さん」

3 地蔵堂（じぞうどう）エリア

※県道 20 号線は交通量が多いため、裏道を散策することをお勧めします。

みどころ

昔の街並みの写真と今の街並みを比べながら、歩いてみよう。

▲現松山大学からみた街並み　（大正 12 年頃）
（『創造都市まつやま』より）

⑤ 堂崩（どうくず）れて 地蔵残（じぞう）りぬ 草の花

当時の地蔵堂が荒れ果ててしまっていた様子がうかがえます。

■地蔵堂

地蔵堂とは、道後一万地蔵のことです。

松山城を建てる時、お城下を守るために城下の出入口六ヶ所に置かれた地蔵の一つです。

みどころ④

歴史あるお地蔵様を見てみよう。

▲昔の地蔵堂
（愛媛文化双書刊行会発行『子規と松山』より）

⑥ 静かさに 礫（つぶて）うちけり 秋の水

秋の冷ややかに澄んだ川の水に小石を投げ込んだ様子を表しています。

■大川

小石が投げ込まれた川は大川のことです。

子規たちが通った道は、石手寺から太山寺に続く遍路道で、当時は道幅も狭く、草かくれに流れる大川の水も澄んでいました。

みどころ⑤

昔の大川の写真と今の川の様子を見比べてみよう。

▶当時の大川の様子
（愛媛文化双書刊行会発行『子規と松山』より）

4 千秋寺エリア

みどころ

当時の面影を残す、子規ゆかりの場所　千秋寺の山門や月台を見てみよう。

▲昔の千秋寺の様子
（千秋寺保管の絵巻より）

▶月台（げったい）

⑦

山本や
寺は黄檗
杉は秋

御幸寺山の麓にある千秋寺と杉並木について詠った俳句です。

⑧

畫をかきし
僧今あらず
寺の秋

子どもの頃から縁のあった周道和尚を子規が懐かしく思っている様子がうかがえます。

■千秋寺

千秋寺は、黄檗宗の名高いお寺で、一六八〇年代に松山四代藩主松平定直が建設しました。山門の「海南法窟」の額は、中国の僧である即非の書と言われており、重要文化財になっています。

「海南法窟」とは、「四国の修業の場所」という意味です。

みどころ⑥

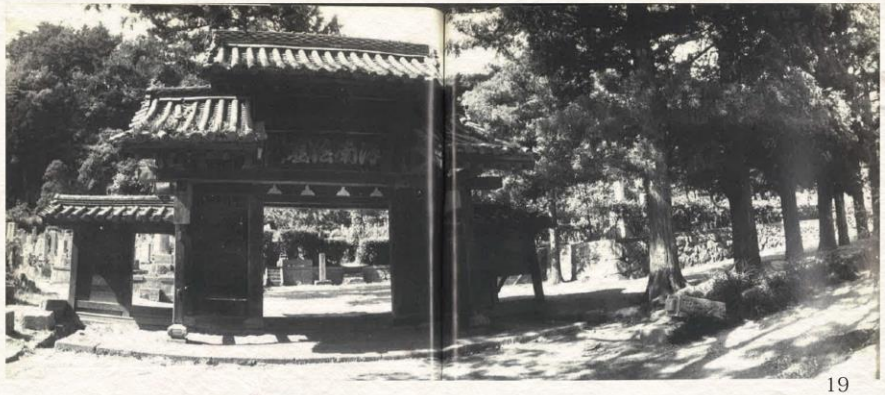
当時の千秋寺の写真と今の様子を見比べてみよう。

■周道和尚

「畫をかきし僧」とは、千秋寺の住職であった周道和尚のことです。

周道和尚は、南画をよく書いたそうで、子規の母方のおじいさんである大原観山や、子規が書を習っていた武知五友との共同作品もある、子規もよく知る人物でした。

ただ、周道和尚は、子規が散策した時の九年前に亡くなっています。



▶昔の千秋寺の山門と杉並木
（愛媛文化双書刊行会発行『子規と松山』より）

5 練兵場（れんぺいじょう）～杉谷町エリア

みどころ

昔の田畑や野原が広がる静かな風景を想像しつつ、子規の歩いた道を歩いてみよう。

⑨ 草の花 練兵場（れんぺいじょう）は 荒れにけり

愚陀仏庵に帰る際に通った城北練兵場が、雑草が生い茂って荒れていた様子を表しています。

■ 城北練兵場（じょうほくれんぺいじょう）

城北練兵場は、現在の堀之内に兵舎があった歩兵第二十二連隊が訓練をする場所でした。

城北練兵場は、現在の松山赤十字病院や東中学校から、愛媛大学城北キャンパス、松山北高運動場や松山大学に及ぶエリアにありました。

当時、兵事に使用していない時は、一般の通行が認められていたそうです。

⑩ 人もなし 杉谷町の 藪（やぶ）の秋

秋の暮れ、杉谷町を通ると、人影もなく、竹藪が生い茂っていた様子を表しています。

■ 杉谷町

杉谷町とは、現在の緑町のことです。

武家屋敷が取り壊された後、崩れかけた建物や土塀が残り、畑や竹藪が広がる人通りの少ない場所でした。

▶昔の杉谷町
（愛媛文化双書刊行会発行『子規と松山』より）

みどころ⑦

昔の写真と今の様子を見比べてみよう。

▲現松山大学からみた城北練兵場（大正 12 年頃）（『創造都市まつやま』より）